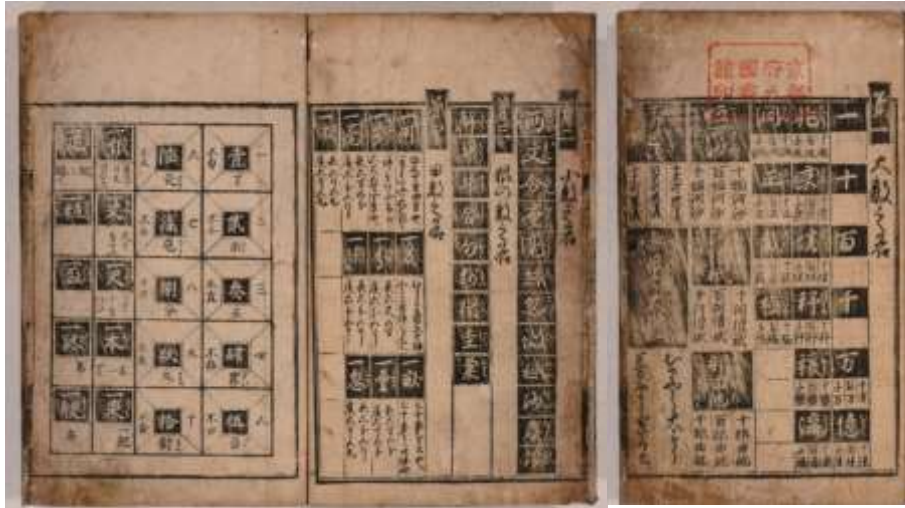


塵劫記：寺子屋でも使われた数学書 の大ベストセラー



『塵劫記(じんこうき)』は、日本独自の数学である和算の教科書です。江戸時代を通じて、多くの寺子屋で使用された和算書の大ベストセラーで、『塵劫記』といえば数学そのものを意味するようになるほど、人々に親しまれました。

塵劫記の著者、吉田光由(よしだみつよし)は、高瀬川の開削事業や豪華な嵯峨本を発行したことで有名な、角倉家の一族に生まれました。数学者の毛利重能(もうりしげよし)に弟子入りし、その後、中国の明の数学書である『算法統宗(さんぽうとうしゅう)』を角倉了以やその子素庵について学びました。

そしてその知識をもとにして、寛永4年(1627)にそろばんの計算法など実用的な問題だけをまとめた数学書『塵劫記』を出版しました。

また、出版後も幾度も内容の追加や色刷りなどの改訂をしています。例えば、寛永11年(1634)に出た版では説明の文章を平易にしてわかりやすくしています。

そして、寛永18年(1641)に出版された『[新篇塵劫記](#)』で

は 12 問の回答がない問題、「遺題」が掲載されました。
すると、この遺題を解いて公表し、合わせて更に難しい遺題を提示する、「遺題継承」という形式の刊本が発売されるようになり、江戸時代に日本の数学が大きく発達する事となりました。

資料館ではこのうち、[寛永 11\(1634\)年](#)と[寛永 20\(1643\)年](#)出版の二種類の『塵劫記』を貴重書として所蔵しています。
京の記憶アーカイブにて画像を公開しているのは寛永 20 年版の資料になります。寛永 20 年版は吉田光由がそれまでに出版したものを書肆(しよし)が編集し直したもので、特に寛永 18(1641)年版『新篇塵劫記』の内容、図版を多く採用しています。



寛政 20 年版の「ねずみ算」と「油分け算」

(2016 年 7 月 5 日公開)